

新たな出会いと感動～ランバス先生の墓を訪ねて

福 島 旭

小春日和の午後、照紅葉が光を真っ赤に透かしている。

キリスト教の暦では年頭にあたるアドヴェント初日、鈴蘭台教会の特別礼拝で「新たな出会いと感動を求めて」とのメッセージを語った。その「出会いと感動」がその直後に「到来」するとは知らずに。奉仕を終え、家路に向かう途中、神戸方面への道路がラッシュでまったく動いていなかった。仕方なく、抜け道を探すために地図を見たことから出来事は始まった。急ぐ予定もなかったことが手伝って、迂回して神戸に抜ける道を見つけた。そしてその途上に「外国人墓地」という標記を見出した。近辺の地理に不自由なゆえ、最初は珍しさぐらいにしか感じていなかったが、ふと一年前に見たある写真を思い出した。

一年前、ある学校の教科書の部分執筆を依頼されて、関西学院創立者の父 J. W. ランバス宣教師のことを調べた時、先生の墓地の写真に出会ったのだった。それ以来、一度訪ねなければという思いだけがここに残っていた。地図に記されている地名、それは「再度公園」。「ランバス先生は再度山の麓に眠られている…」との記述も覚えていた。もしや…。

興奮と緊張を全身に溜めて、外国人墓地に向かった。駐車場から再度公園をくぐり抜けたが、往きの道では秋の気配など感じる余裕もなかった。しばらく歩いた突き当たりに、厳重な門が構え立っていた。門には「一般の方は立ち入り禁止」と厳しい口調で記されていた。がっくりした。せっかくここまで辿り着いたのに。いったんはあきらめ車に戻ったが、どうしても気持ちがおさまらず、叱られた上に断られるのを覚悟で、恐る怖るかつ冷静に無断で門を開いた。

正式名称は「神戸市立修法ヶ原外国人墓地」。もともと山と海の境界地であり、物品交換が塩によってなされていたことから、「塩ヶ原」ともいうらしい。それが訛ってか、正式な地名は「下谷」。ランバス先生の墓石は「小野浜3区52」の場所に建立されていた。この「小野浜」とは神戸にあった居留地内の地名で、1899年頃その地から移転された墓地が集められ、昔の地名がそのまま付けられていた。墓地の一番奥に写真で見たままのランバス先生の墓石が存在した。広大な墓地には見渡す限り人影はない。様々の形の墓石は不思議な光景だった。その不思議さ以上に秋の自然の生命に囲まれて気持ちが温かくなり、祈りをささげた。初めての経験だった。

墓石に記された英語聖書のことば「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました」を何度も読んだ。また墓石の側面に刻まれていた「竹」のデザインを見て、竹一筋に生きて10年前に帰天した父を思い起こした。私の父はランバス先生と同じ年齢で亡くなっていた。帰路の紅葉は血のように赤かった。言葉にならない思いを重ねて、言葉にできない祈りをささげ、神様からの年頭の贈り物に感謝した。

(中学部宗教主事)